

## カーテンの向こう

ここは、とある病院の一室である。うす暗い室内には多くの重症患者がベッドをならべて横たわっている。窓がたった一つしかなく、しかもそれは、分厚いカーテンによつていつも閉ざされている。消毒薬のにおいが室内の重苦しさを、いっそう濃いものにしてゐる。患者たちは、眠っているのか起きてゐるのか、うつろな目を天井に向け、ただ時の過ぎるのをじっと待つてゐる。なんの楽しみもない。変化のないことがこんなにつらいとは――

そんな中での唯一の楽しみは、病院の閉ざされた窓に一番近い老人が、体をやつとの思いでねじまげながらカーテンのほんの小さなすき間に顔をつつこんで、外の様子をながめ、それをみんなに話してくれることだった。今日も、老人は、苦しうに身をのり出して、すき間に顔を近づけ、

「ほら、向こうの方からいつもの花売り娘が、バラをいっばいかごに入れてやつてくるよ。とつてもかわいい子だよ。」

と教える。

「バラの花は何色だい。きれいだろうね。」

「今日は、どんな服を着てるかね。良くなつたら、一緒に話をしてみたいものだ。」とみんなは、頬をほころばせる。「ほら、今日は雨が強いから、大変だ。でも、子供たちが、水たまりをピチャピチャやつて遊んでるよ。子供は元気だなあ。」

「じいさん、わしらもよくなつたら、水たまりで子供みたいに思いつき遊んでみたいものだ。」

「わしにも孫が二人いるが、大きくなつただろうな。」

老人が外の様子を話してくれるときだけは、暗い病室に、なにか期待と夢が入り込んでくるのであった。

うだ。今日一日だけでいいからベッドを代えてくれないかい。少しでも外の息吹にふれて、あの世とやらに旅立ちたいんだが――。しかし老人は、この申し出を無視した。翌朝、若者は冷たくなつてゐた。病室はいつになく重く沈んだ。

私だつて外が見たい。窓際のベッドへ行きたい。そうさ。彼が死ねばいい。そうすれば、その次に古い私とそのベッドに行けるのだ。

その日から、私は心の中で、老人の病気が重くなることをひそかに願つた。みんなと一緒に老人の話に笑つてゐるときも、心の奥底では、にこりもしない自分がいた。

その年の冬は、例年になく寒かった。病室もしんしんと冷え込んだ。どうやら老人の様子がおかしい。なんとなくかわいた咳をしている。

みんなは、いつものように外の様子を聞きたがつた。しかし、今日は、老人は話したがらなかつた。

その晩、彼は苦しい息の下で、やつとの思いで身を乗りだし、しぼり出すように外の様子をみんなに伝えた。

「明日は、良い天気だよ。星がいつぱい出ている。きつと――いい日になる――。」

そこまて言うのと、がつくりと頭を落とし、そのまま一言もなかつた。

看護婦がやつてきた。老人はすでに息が絶えていた。みんな悲しんだ。私もみんなと同じように悲しい顔をしてゐた。けれども、どこかで笑つてゐる自分がいた。

これで外の様子を独り占めにできる。みんなになんか知らせてやるものか。おれひとりだけ楽しむんだ。にんまり笑いが込み上げてくる。

いよいよ窓際のベッドに移ることになった。昨晚は気持ちがあつた。眠れなかつた。

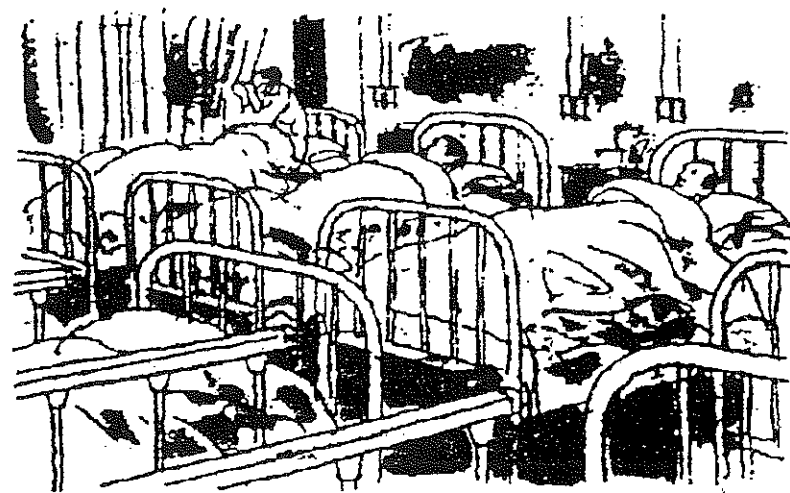
私は、数年前から足の骨がとけていく奇病にとりつかれた。いくつもの病院をめぐつた末に、ここに運ばれたのだ。同室の患者たちも、なんらかの重い病氣にとりつかれた人たちである。ここでも何人かの患者が入つてきては、何人かが出ていく。出ていくといつても退院するのではなく、あの世からのおむかえである。いつのまにか、私は、老人について二番目に古い患者になつてしまつた。ここに運ばれてくる者は、ほとんど治る見込みのない病人なのだろう。重苦しさの中で、老人の話だけがせめてもの希望であつた。

しかし、老人が眠つてしまつと、どんなに外の様子を知らたくても、どうしようもない。動けぬ体をジリジリしながら、老人の話を待つしかない。いや、老人だけが外の世界を知つてゐるのがうらやましくもあつた。しかし、みんなが行きたがつてゐる窓ぎわのベッドは、一番古くからこの病室にいる彼の特権だった。

今日は朝から、老人は機嫌がよく、道を通る人々の様子や木々の変化、葉の緑のあざやかさなど、おもしろおかしく話してくれた。みんなも、その話を聞きながら、それぞれ、故郷の様子や家族のことを思い浮かべてゐた。そのうち、私は、なんとなく老人が憎らしくなつてきた。寝たきりでみんな苦しんでいるのに、彼だけがなぜ外の様子を知らず知らずと知つてゐるのか。

みんなだつて外を知りたい。みんなだつてあこがれてゐる。ベッドを代えて欲しいと思つてゐる者は、たくさんいた。

しかし、老人は、頑として、その場所を人にゆずらうとはしなかつた。



看護婦に抱きかかえられて、カーテンのそばに横になつた。今になつて眠気がおそつてきた。しかし、それを払いのけるように私は、カーテンのすき間をのぞき込んだ。

そこから見える外の景色、これこそ自分が求めていたものはずだ。

期待に胸がうちふるえた。

その時、私は自分の目を疑った。

私の視界に入ってきた風景……

それは、赤いレンガ作りの壁だった。私は動かない身体を精一杯に伸ばし、見える限りの範囲を見渡した。でも、右を見ても、左を見ても、上を見ても、下を見ても、私の目に映るのは赤いレンガ造りの壁だけだった。

同室の重症患者達が私に話しかけている。

「今日は良い天気なのかい？」

「いつもの花売り娘はいるかい？」

「子供達は元気に遊んでいるのかい？」

患者達は、あの老人の時と同じように私が返す言葉に期待をしているに違いないだろう。でも、私には何一つ言葉を返すことができなかった。ただ、とりとめもなく涙ばかりがあふれては落ちていくだけだった……

